

# 鎮西米の東大寺運上

ちんせいいまい

東大寺は、古代以来の基本的な財源である封戸（律令制における親王・貴族・寺院等への俸禄の一つ）が9～11世紀に次第に形骸化してくるなかで、新たな財源確保のため、保安元（1120）年に觀世音寺の末寺化を果たします。觀世音寺領から東大寺へ納入される年貢米を鎮西米と称し、この鎮西米は、長きにわたって東大寺の諸法会を支える重要な財源として機能しました。

觀世音寺領から東大寺への最初の年貢輸送が確認されるのは、末寺化して間もなくの大治2（1127）年のことです。同4年には、2041石余りの年貢米のうち、実際に1518石余りが東大寺に収められていることが確認できます。しかし、次第にこの額は少なくなったようで、建久6（1195）年、東大寺別当勝賢は400石の運上を定めています。さらに、勝賢没後には、觀世音寺別当定勝の訴えによつて、350石まで減少しました。鎌倉後期頃の状況を記したとされる「東大寺年中行事」（年間に行われる法会や行事の必要経費とその財源などを書き出した史料）でも、鎮西米の年貢総数を350石と記しており、少なくともこの時



期までは350石の運上で固定化されていたと考えられます。南北朝期以降は運上が滞り、量も大幅に少なくなりましたが、室町期にいたつても東大寺の史料中に鎮西米の存在は確認できることから、このころまでは鎮西米の運上が存続していたようです。

近年、三輪眞嗣氏が東大寺の財政構造に関する研究として、鎌倉期における鎮西米の基礎的な考察内容と、「東

大寺年中行事」の分析からみる鎮西米の財源としての特徴を明らかにされました。これによると、鎮西米は12月から6月にかけて觀世音寺領庄園から数度に渡つて東大寺に運ばれ、多額なことと東大寺内に数カ月にわたってプレーされる財源であつたことから、他の財源で支払われるべき用途にも流用される柔軟性を有していたことを指摘しています。また、「東大寺年中行事」の分析からは、東大寺財政の中で大半を占めるのは寺領庄園ではあるものの、鎮西米は比較的少額の多様な用途に下がれており、庄園などからの収入を補完し、諸法会の勤修を維持するため不可欠な財源であつたとしています。従うべき見解でしょう。